中国

寧夏回族自治区

北京事務所所長補佐　中司　弓彦（島根県松江市派遣）

寧夏回族自治区は、中国の北西部に位置する砂漠の中の地。極度に乾燥した気候にありながら、黄河の豊富な水運によりつくられた緑豊かな街であり、回族の文化を持つ色彩あふれる街でもあります。かつて西夏王国が二百年に渡って支配した地には、今も土の長城が残り、悠久の歴史を伝えています。今回は、そんな寧夏の今の姿を紹介します。

概要

寧夏回族自治区は、中国の西北部に位置する省級政府です。面積が六・六万㎢、人口五九〇万人と、直轄市と台湾を除けば、海南省に続いて中国で二番目に面積の小さい省級の地方政府です。区都は銀川市で、北京から飛行機で約一時間半の距離にあります。北京から西へ約九〇〇㎞に位置し、人口は約一三八万人です。西安市を出発点として（一説には洛陽が出発点ともいわれています）西へ続くシルクロードの通り道になっています。周囲を内モンゴル自治区、陝西省、甘粛省と接し、西にテンゲル砂漠、賀蘭山脈といった砂漠と山地に囲まれています。にもかかわらず、自治区内の南から北に黄河が流れており、古くから黄河の水を灌漑に利用した農地が整備され、多くの農作物が生産されています。

自治区の経済的・文化的な中心地は、一〇三八年にチベット系民族により建国された西夏王国の首都・興慶府がおかれた地でもある区都・銀川市です。現在の寧夏回族自治区、甘粛省、内モンゴル自治区の大半を領土とした西夏王国は、井上靖の小説『敦煌』の時代背景ともなっており、かつての大帝国にロマンを感じる方も多いのではないでしょうか。銀川市郊外の賀蘭山のふもとには、西夏王の墓である西夏王陵があり、国家重点風景名勝区に指定され、多くの観光客を集めています。また、人気アイドルグループ・SMAPの香取慎吾が主演した映画「西遊記」のロケは、銀川市にある映画撮影所で行われました。

寧夏の文化と回族

寧夏回族自治区は、その名の通り、中国で最も多く回族（イスラム系少数民族）が居住している地域であり、自治区総人口の約三割を占めています。中国には五五の少数民族が居住しており、回族もそのうちのひとつです。回族の起源は、商売目的でインド洋・中央アジアを経由して渡ってきたアラブ・ペルシャ系のムスリムの人々であるといわれています。回族は青海省や甘粛省をはじめ、中国全土に居住していますが、寧夏回族自治区に最も多く居住しています。銀川市内にはいくつかのモスクもあります。

回族の人々は、イスラム教を信仰しており、一般的に豚肉を食べず、アルコール類を摂取しないといわれています。しかし、信仰の度合いは人によって異なってい

⬆銀川市内にあるモスク

るのが実情で、厳格にイスラムの教えに沿った生活をしている人もいれば、アルコールを飲む人もいるようです。

寧夏の街を歩いていると、多くの「清真」という緑色の看板を掲げた食堂があります。清真とは、イスラム教（＝回教）を意味し、豚肉を出さない、あるいは豚肉由来の食材や、アルコールを使わないという意味です。清真料理は、北京など中国の他の町では、あまり多くは見られないものですが、寧夏や新疆ウイグル自治区などイスラム教を信仰する人が多く居住する地区では、本場の料理です。寧夏では、友人など複数で食事に行くとき、その中に一人でも回族の人がいると、必ず清真の食堂に行きます。

回族は豚肉を食べませんが、牛肉や羊肉を頻繁に食べます。日本人の羊肉のイメージといえばジンギスカンですが、中国では羊肉料理が非常に豊富です。羊肉の代表的な料理に、「羊肉湯」があります。羊肉を煮込んだ白いスープで、臭みもなく、薄味で非常に美味しいです。また、「羊肉串」はその名のとおり、羊肉を串焼きにしたものですが、日本の串焼料理と異なり、串がかなり長く、肉も大きめです。「孜然」（クミン）という香辛料をかけて食べると、羊肉とよく合い、食欲をそそられます。また清真の「牛肉拉麺」も、この地域の代表的な料理です。

⬆街角で羊肉串をつくっている様子

義務植林と西部大開発・産業

寧夏は周囲を砂漠に囲まれており、緑化は最も重要な課題のひとつです。寧夏では「義務植林」といわれる制度があり、行政・企業を含むすべての単位と中学生以上の学生は、一定の年月ごとに植林を行う義務を課せられています。これは、単位であれば、植林地の管理を原則として三年間義務づけられ、植林作業とその後の維持管理を任せられます。その後は、植林地は園林管理当局の管理下に移管されます。この義務植林の制度が功を奏し、銀川市などでは、砂漠の中の地という一般的なイメージとはかけ離れ、市の中心部や郊外は多くの緑に覆われています。銀川市は、降水量が年間約二〇〇ミリメートルほどですが、ポプラやヤナギ、エンジュなど乾燥に強い樹種を中心に栽培されています。銀川市では、今後は友好都市をはじめとする日本の自治体に協力を求め、日中友好林を整備するとともに、他の地域でも継続的に植林を進めていく計画です。

また、中国では国家をあげて西部大開発の施策を押し進めています。これは、前政権である江沢民政権により第十次五カ年計画（二〇〇〇～二〇〇五年）に提起されたもので、改革・開放経済政策の進展以降、沿岸部の経済発展から取り残された西部地域の経済開発を目的としています。主な手法として、鉄道や高速道路、空港等社会基盤の整備や、外資投資の奨励、科学教育の推進などの優遇施策を実施しています。これにより、対象である十二の省・区・市のGDPは高い伸びを記録しています。二〇〇六年に開通した青海省とチベット自治区を結ぶ青蔵鉄道も西部大開発の代表的なプロジェクトのひとつです。

この西部大開発により、二〇〇〇年に八三㎞であった高速道路延長が二〇〇八年に一〇〇〇㎞超にまで整備され、GDPは二六五億元から一〇七〇億元にまで押し上げられました。中国で最も所得水準の高い地域のひとつである上海市と比較すると、二〇〇〇年に都市部の住民一人あたりの収入較差は、上海が寧夏の二・三八倍だったのが、二〇〇八年には二・〇六倍まで縮小しています。

また、寧夏の代表的な特産品として、クコ（枸杞）の実があります。年間約七万トンの生産量を誇っており、これは中国全土の生産量の約半分を占めています。クコの実は、中国原産の植物で多種類のビタミン、ミネラルを含んでおり、古くから漢方薬として使われてきました。乾燥に強く、虫害

⬆道路沿いの植林の様子

にも強いため、気候の乾燥している寧夏でも多く栽培されています。果実は大きさ一センチほどの楕円形で、赤く熟し、ドライフルーツとして、また中華スープや杏仁豆腐にも使われるほか、クコ茶、クコ粥としても利用されます。寧夏では、特に「中寧枸杞王」というブランドが有名です。このほか、棗（なつめ）、梨、ぶどう、すももなど多くの果物の産地でもあります。

日本の自治体との交流

当協会では、海外と日本の自治体による友好都市提携を支援していますが、ここでは、寧夏回族自治区およびその区都である銀川市の友好交流事例を紹介したいと思います。

寧夏回族自治区は、島根県と一九九三年に友好交流提携に調印して以来、多くの友好交流事業が実施されています。緑化協力事業では、「島根・寧夏友好林」が造成され、毎年県民ボランティアが訪中し、寧夏の人々と共同で友好植林活動が続けられています。また寧夏における下水道汚泥利用技術の確立を支援するため、独立行政法人・国際協力機構（ＪＩＣＡ）の草の根技術協力事業として、自治体専門家の派遣、及び研修員の受入がなされ、技術支援交流が行われています。この事業により、下水道汚泥の減容化、無害化、資源化において成果をあげています。

また、二〇〇二年に北京で開催された「日中国交正常化三十周年記念・日中友好都市中学校卓球大会」に島根・寧夏の中学生による合同チームが出場するなど、青少年交流の分野でも活発な活動が行われています。さらに、島根県内の公民館における市民募金活動により集められた資金を使って、寧夏に小学校二校が建設されるなど、両者の交流は着実に成果をあげています。

また、区都である銀川市は松江市と、北部の石嘴山市が浜田市と、いずれも島根県の自治体と友好関係にあります。銀川市と松江市は二〇〇四年に友好都市提携を調印して以来、今年五周年の節目を迎えます。現在では、毎年職員の相互派遣を行ったり、当協会の自治体国際協力専門家派遣事業や自治体国際協力促進事業（モデル事業）にも採択されている環境教育プロジェクトや水道技術協力を行っており、友好都市としての関係はますます深まっています。また寧夏の人々は大変人懐っこく、友情を大事にします。筆者も二〇〇六年に銀川を訪問した際に受けた情熱的な歓迎は今でも忘れられません。

また、寧夏大学と島根大学により、二〇〇五年には寧夏大学構内に共同研究所が設立されており、表土流出や砂漠化が厳しい中国西部における農山村の開発と環境に関する研究の拠点となっています。現在、両大学の交流により毎年多くの寧夏大学の卒業生が島根大学に留学しています。

このように寧夏回族自治区と島根県による多岐に渡る友好交流活動を通して、双方の市民の相互理解が今後も進められていくことでしょう。

おわりに

寧夏回族自治区は、現在、日本人の多くにとってなじみの深い地域とはいえません。しかし、西部大開発による交通網の整備、緑化施策の効果は大きく、友好都市を通した交流により寧夏と日本の距離は確実に縮まりつつあります。今後、多くの日本人が寧夏を訪れることを祈念しています。